

【はじめに】

近年、配合飼料の高騰等により畜産経営は厳しさを増している。また、水稻の生産安定対策として飼料用米の作付けが推進されている。そこで、飼料用米を簡便に利用できる方法として、一般配合飼料への単純添加が阿波尾鶏の生産性や肉質におよぼす影響を調査した。

【試験方法】

試験期間は2014年5月27日から8月19日の84日間、供試鶏は阿波尾鶏172羽を用い、試験区、対照区共に雌雄混飼で各区86羽とした。対照区の飼料は全期間一般配合飼料を給与した。試験区は8週齢までは一般配合飼料を給与、8週齢から12週齢の4週間を全粒玄米の飼料用米を添加した飼料を給与した。配合割合は一般配合飼料：飼料用米を5：1とした。調査項目は増体重、飼料摂取量、と体調査、肉質検査（肉色、栄養基礎成分、遊離アミノ酸）とした。

【試験結果】

試験区において選び食いは認められなかった。雌雄平均の体重推移を図1に示す。両区の推移はほぼ同等で、大きな差は認められなかった。

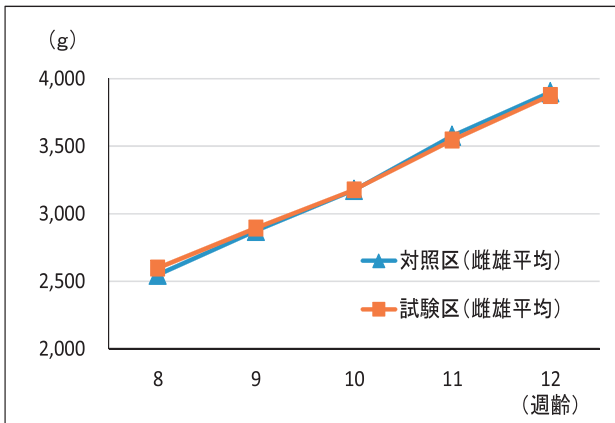


図1 体重推移 (雌雄平均)

飼料要求率は、両区ほぼ同等であった。育成率は、試験区で83日齢に1羽へい死がみられたのみで、ほぼ同等であった。へい死の原因は不明であった。ブロイラーの生産性を総合的に判断する指標であるプロダクションスコア (PS) もほぼ同等であった (表1)。

表1 飼料要求率・育成率・PS

区(雌雄)	飼料要求率						育成率 (%)	PS
	3W	8W	9W	10W	11W	12W		
対照区(混飼)	1.38	1.97	2.05	2.20	2.28	2.31	100.0	201.0
試験区(混飼)	1.39	1.95	2.07	2.18	2.28	2.31	98.8	197.6

飼料要求率: 飼料摂取量/増体重

育成率: 出荷羽数/餌付け羽数×100

PS(プロダクションスコア): ((体重×育成率)/(飼料要求率×出荷日齢))×100

と体歩留では、対照区の雌雄平均94.1%，試験区94.8%，正肉歩留は対照区38.9%，試験区38.6%，可食内臓計が対照区，試験区共に3.4%，腹腔内脂肪が対照区，試験区共に3.9%であった (表2)。

これらの結果から、と体成績についても両区に差はみられなかった。

表2 と体成績

項目 区(性別)	(体重:g, 其他:%)												
	生体重	と体重	と体歩留	むね	もも	正肉歩留	ささみ	骨付き手羽	可食内臓			腹腔内脂肪	
									心臓	腸胃	肝臓	計	
対照区(雄)	4,520.0	4,230.0	93.6	17.1	22.6	39.7	4.1	9.2	0.4	1.2	1.7	3.3	2.0
対照区(雌)	3,263.3	3,086.7	94.6	16.7	21.5	38.2	4.2	9.0	0.4	1.1	2.0	3.5	5.7
(雌雄平均)	3,891.7	3,658.3	94.1	16.9	22.1	38.9	4.1	9.1	0.4	1.2	1.8	3.4	3.9
試験区(雄)	4,466.7	4,210.0	94.3	15.6	22.2	37.8	3.8	9.0	0.4	1.2	1.9	3.5	3.6
試験区(雌)	3,396.7	3,236.7	95.3	18.0	21.4	39.4	4.3	8.7	0.4	1.1	1.8	3.2	4.1
(雌雄平均)	3,931.7	3,723.3	94.8	16.8	21.8	38.6	4.1	8.9	0.4	1.1	1.9	3.4	3.9

むね肉を材料とし、肉色を測定した。試験区は対照区と比較しやや明るく、赤色度a値と黄色度b値はやや低い傾向にあったが有意差はなく、飼料用米給与により懸念されていた肉色への影響は、目視ではわからない程度のものであった。

栄養基礎成分、遊離アミノ酸についても概ね同等の結果であった。

【おわりに】

今回の飼料用米添加給与試験において、嗜好性、生産性および肉質について両区に顕著な差は認められなかった。

これらのことから、本技術は農家段階でも簡便に実施可能な飼料用米給与方法として普及性があると示唆された。

(畜産研究課 養鶏担当 山田 みちる)